白山ふるさと文学賞

第十五回　白山市ジュニア文芸賞　受賞作品

【暁烏敏部門】〈作文「母へのおもい」または「家族へのおもい」〉

中高校生の部　最優秀賞

「当たり前ではない時間」

北辰中学校三年

山内（やまうち）　ひまり

私はこれまで、家族がそばにいることを当たり前のように思っていました。毎日一緒にご飯を食べたり学校から帰ると「おかえり」と言ってもらったり、困ったときには助けてもらえたりすることが、これからもずっと続いていくと思っていたからです。しかし、一昨年、父方の祖母が亡くなったこと、母方の祖母が認知症になったことをきっかけに、私は家族と過ごせる時間は決して当たり前ではないのだと気づきました。

父方の祖母が、ガンで亡くなりました。私はそれまでにも、親戚の葬儀に出席したことがありました。しかし、その頃の私はまだ幼く、亡くなった人も遠い親戚だったため「人が亡くなる」ということをあまり身近なこととして考えていなかったのだと思います。葬儀に出席しても、悲しいという気持ちはあっても、それが自分の生活に大きく関わることだとは感じていませんでした。けれど、祖母の葬儀は、それまでとは全く違うものでした。いつも会っていた祖母が、もう二度と話したり、一緒に過ごしたりすることができない存在になったのだと、強く実感しました。葬儀の中で、祖母の写真を見たり、家族や親戚が祖母との思い出を話したりしているのを見ていると、「本当にもう会えないんだ」と思い、悲しさが込み上げてきました。

祖母とは、会うたびにいろいろな話をしたり、一緒に食事をしたりしました。祖母の家に行くと、笑顔で迎えてくれたことを今でも覚えています。しかし、祖母が元気だった頃の私は、「また今度会えばいい」と思っていました。これからも何度でも会えると思っていたからです。だからこそ、亡くなった後になって、もっと話をしておけばよかった、もっと一緒に過ごしておけばよかったと思いました。

この経験を通して、私は家族と過ごせる時間には限りがあるのだと気づきました。今まで当たり前だと思っていた会話や、一緒に食事をする時間も、決して当たり前ではありません。失ってから気づくのではなく、今そばにいる家族との時間を大切にしたいと思うようになりました。

そして、もう一つ私が家族について考えるきっかけになったことがあります。それは、母方の祖母が認知症になったことです。認知症になってから、徐々に同じことを何度も聞いたりすることが増えました。以前なら当たり前にできていた会話が思うようにできなくなっていくのを見て、私は寂しい気持ちになりました。

祖母の様子を見ているうちに、私は「家族との時間は今しかない」ということに気づきました。父方の祖母にはもう会うことができず、母方の祖母ともこれから先、今までと同じように話せるとは限りません。だからこそ、今一緒にいられる家族との時間を大切にしたいと思うようになりました。

私は、これまで家族にたくさん支えてもらってきました。毎朝起こしてくれたり、毎日ご飯を作ってくれたり、悩んでいるときに話を聞いてくれたりします。振り返ってみると、当たり前のように感じていたことも、一つ一つが家族の優しさだったことに気づきました。

また、今まで私は家族に対して、ちゃんと「ありがとう」と言うことがあまりありませんでした。家族だから言わなくても伝わると思っていたからです。しかし、言葉にしなければ伝わらない気持ちもあると思います。これからは、照れくさくても、感謝の気持ちをきちんと言葉にして伝えていきたいです。

来年から、私は高校生になり、今まで以上に自分の生活が忙しくなっていくと思います。もしかしたら、家族と過ごす時間が少なくなっていくかもしれません。それでも、「忙しいから仕方ない」と家族との時間を後回しにするのではなく、できるだけ一緒に過ごす時間を作りたいです。

父方の祖母が亡くなったこと、母方の祖母が認知症になったことは、私にとって悲しい出来事でした。しかし、その二つの出来事があったからこそ、私は家族の大切さに気づくことができました。

家族がいつまでも元気で、一緒にいられるとは限りません。だからこそ、今そばにいる家族を大切にし、一緒に過ごせる時間を大切にしたいです。そして、いつか「あのときもっと話しておけばよかった」と後悔しないように、今できることをしていきたいです。

私にとって、家族とは当たり前にそばにいる存在ではなく、かけがえのない存在です。これから先、環境や生活が変わっても家族への感謝を忘れず、お互いを思いやり、支え合える関係を築いていきたいです。

